

子ども時代の組織キャンプ経験に関する自伝的記憶：
記憶特性質問紙を用いた検討

佐藤 冬果¹⁾ 井村 仁²⁾

The Autobiographical Memories of Organized Camp during Childhood:
Using the Camp Memory Characteristics Questionnaire

Fuyuka SATO¹⁾ Hitoshi IMURA²⁾

The memories recollected from an individual's life are referred to as autobiographical memory. When people recollect one's past, we undergo the process of autobiographical reasoning as well as recalling merely. That is the activity of creating relations between different parts of one's past, present, and future life and personality and development.

The purpose of this study was to elucidate the lasting impacts of organized camps on participants as they reached their adulthood through the viewpoint of autobiographical memory and autobiographical reasoning. The data were collected using a "Camp Memory Characteristics Questionnaire," which was completed by 191 participants and analyzed using statistics. It was shown that memories of outdoor activities, such as "campfire," "hiking or Solo," "involvement with the camper," "involvement with the camp counselor," and "meaningful nature experience" were the most memorable events of camp in most of the respondents. Especially, the memories of "accomplishment," such as "hiking or Solo" were recalled more frequently as well as more clearly, and they are valued as more important than the memories of other activities. In addition, the memories of camp remained in participants' minds regardless of how much time has passed. By comparing and analyzing respondents' ages, these memories appear to have become more important as participants grew older. Furthermore, around 80% of respondents recognized the impacts of organized camp experiences. Participants also have attributed a variety of meaning to their camp experiences, and it was classified into 6 groups: "self," "others," "nature environment," "outdoor activity," "occupational choice," and the other.

**Key words : organized camp, autobiographical memory , autobiographical reasoning,
memory characteristics, long-term impact**

1) TOEL (Tsukuba Outdoor Education Lab.)
〒305-8574 茨城県つくば市天王台 1-1-1
2) 筑波大学体育系
〒305-8574 茨城県つくば市天王台 1-1-1

1) TOEL (Tsukuba Outdoor Education Lab.)
1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki (305-8574)
2) Faculty of Health and Sport Science, University of
Tsukuba
1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki (305-8574)

1. 序論

子どもを対象とした組織キャンプ(以下、キャンプ)が各地で行われている。キャンプが参加者に与える影響はこれまでに様々な角度から研究がなされ、キャンプ後の参加者に様々な肯定的変化がみられることが明らかにされてきた。その一方で、「キャンプは即効性の期待できる方法ではない」¹⁾とも指摘されている。子ども時代にキャンプに参加した経験は参加直後の参加者に影響を与えるだけでなく、時を経てその影響が顕在化したり認知される場合もあるなど、参加者のその後の人生に長期的な影響を及ぼすことが考えられる。

過去の経験が後の人生にもたらす影響に関する研究アプローチの一つとして、認知心理学の分野において「自伝的記憶」の研究が進められている。自伝的記憶は、Squire(1992)²⁾の記憶分類モデルにおいては「長期記憶」に含まれ、その中でも言語やイメージで表現が可能な「陳述記憶」に分類される「エピソード記憶」の一つであるとされ³⁾、過去の自己に関わる記憶である(図1)。

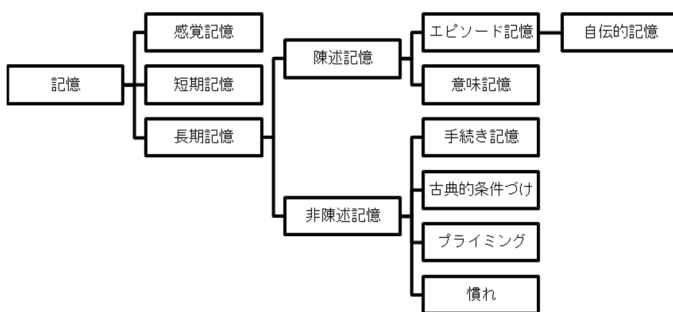


図-1. Squireの記憶分類モデルと自伝的記憶 (Squire(1992)²⁾, Liddicoat (2013)³⁾を基に作成)

人は過去の出来事の記憶を単に想起するだけでなく、想起された出来事を解釈・評価したり、過去の記憶を互いに結び付けたり、過去の記憶と現在の自己を結び付けたりする。こうした内省的な思考過程である「自伝的推論」⁴⁾を経て、出来事のエピソード記憶は、自己を支える自伝的記憶になると言われている⁵⁾。

る⁵⁾。

自伝的記憶に関する研究は、長らくトラウマ体験などの否定的な経験に何らかの意味を見いだす内容を主なテーマとしてきたが、近年は日常の記憶にも焦点が当てられ、重要な機能を有する記憶の記憶特性や、記憶の持つ機能、自己への影響などが研究されている。佐藤(2007)⁶⁾は、その人にとって重要であると認識される出来事の記憶がもつ記憶特性として、より鮮明に、当時に引き戻される感覚を伴って想起されること、想起内容が正確であるという確信を伴うこと、前後の出来事や関連する出来事と一緒に、一貫性をもって想起されやすいこと、頻繁に想起されたり他者に語られたりすること、快感情を伴う出来事を想起した人はそれらの出来事から影響を受けたと認識する率が高く、想起時は経験時と同様に快感情を伴うことを示している。また、自伝的推論と関連する重要な変数として「年齢」、「想起時点での自己」、「想起内容」の3つを挙げ、自伝的推論は加齢に伴い活発化すること、想起主体である自己にとって重要なテーマをめぐって人は活発な自伝的推論を行うこと、日常の記憶において、肯定的な出来事は否定的な出来事よりも活発な自伝的推論を引き出すことを示し、現在の自己に繋がるきっかけや目標を得るなど、肯定的な出来事に対しても、人は活発な自伝的推論を行うことを主張している。

今日に至るまで、キャンプの教育効果に関する研究は、主に参加者のキャンプ前後での変化を量的に比較する Pre-Post デザインを用いて行われてきた。それらの研究においては、キャンプ前後で自己概念などの得点の肯定的な変化が認められている一方で、キャンプ終了後数ヶ月後にはキャンプ前の値に戻っていたとの報告もある⁷⁾。しかし長期的な視点でみたとき、キャンプの経験は参加者の記憶となって年月が経過した後までも残り続け、想起、再解釈されるなかで短期的な Pre-Post

研究では拾いきれない何らかの影響を与えている可能性は十分に考えられる。キャンプ終了後、年月が経過した後の長期的な影響に着目した研究は、国内では不登校児を対象としたキャンプ⁸⁾⁹⁾や冒険プログラムを主な活動内容としたキャンプ¹⁰⁾¹¹⁾などを対象に行われ、また、海外では Liddicoat(2013)³⁾や Cummings(2009)¹²⁾がキャンプ経験による長期的な影響を研究しているものの、Liddicoat がキャンプの長期的な影響について調査している研究の少なさを指摘し、その必要性を述べるなど、国内外を問わず長期的な影響の検討は十分とは言えない現状にある。

そこで本研究では、子ども時代のキャンプ経験が参加者に与える長期的な影響を明らかにすることを研究の目的とし、子ども時代の組織キャンプ参加経験に関する自伝的記憶の内容とその記憶特性(課題 1)、および子ども時代の組織キャンプ参加経験に関する自伝的推論の程度とその内容(課題 2)に關しての検討を行った。

2. 方法

2.1. 調査内容

自伝的記憶に関する調査研究⁶⁾¹³⁾¹⁴⁾を参考に、①フェイス項目、②キャンプ参加経験、③キャンプに関する自伝的記憶、④記憶特性、⑤キャンプの記憶に関する自伝的推論の 5 領域から成る「キャンプの記憶に関するアンケート」を作成した。

2.1.1. フェイス項目

アンケート回答者の現在の①年齢、②性別、③職業、④婚姻関係、⑤子どもの有無、⑥現在の野外活動実施頻度について回答を求めた。

2.1.2. キャンプ参加経験

子ども時代に参加経験のある全てのキャンプについて、①キャンプに参加した時期(学年を選択)、②キャンプの実施形態(「学校教育におけるプログラム」、「地方自治体のプログラム」、「青少年教育施設が主催するプログラム」、

「民間団体が実施するプログラム」、「その他」、「覚えていない」から選択)についての回答を求めた。

2.1.3. キャンプに関する自伝的記憶

自伝的記憶の内容(課題 1)を検討するため、これまでに参加したキャンプの中で最も印象に残っている出来事や場面について、①時期(学年を選択)、②キャンプの実施形態(前述項目から選択)、③プログラム名、④宿泊の有無(宿泊を伴う場合はその日数)、⑤参加動機(「自ら希望して」、「親や先生などに勧められて」、「友人に誘われて」、「基本的に全員参加だった」、「その他」から選択)、⑥出来事の詳細(自由記述)について回答を求めた。出来事の内容についての自由記述においては、回答の際の手がかりとなるキーワードとして「活動の内容」、「登場人物」、「当時の感情や考えていたこと」、「自然・景色」、「日時」、「時間経過」などを提示した。

2.1.4. 記憶特性

記憶特性は、様々な研究者により研究が進められているが、「記憶特性を測定する標準的な尺度が開発されているわけではない(p.128)」⁶⁾、「多くの研究は Johnson et al.(1988)¹⁴⁾の記憶特性質問紙(MCQ)等を参考に、研究目的に合致した項目を抽出して使用している(p.128)」⁶⁾と言われる現状にある。本研究においては、Johnson et al.¹⁴⁾の MCQ を基とした日本語版 MCQ(Takahashi et al.,2007)¹³⁾に、出来事の重要性に関する項目を加えて佐藤⁶⁾が作成した 9 因子構造の記憶特性調査項目(45 項目)から、各因子において負荷量の高い項目を中心に、本研究の目的である「記憶の記憶特性(課題 1)」と「自伝的推論の程度(課題 2)」の測定に適合する質問項目を記憶特性の構成概念を網羅するよう抽出し、修正を加えた 19 項目について 7 件法で回答を求めた。19 項目の質問内容は、記憶を想起したり人に話したりした頻度である「リハーサル頻度(3 項目)」、記憶の鮮明さや詳細さで

表-1. 記憶特性質問項目のカテゴリー分類と質問項目例

| | | |
|---------|---------------------------------------|----------------------------|
| リハーサル頻度 | この出来事が起こってから、そのことについて思い出したり考えたりした回数は、 | 1:まったくない～7:何度もある |
| 鮮明度 | この出来事の記憶は、 | 1:おおざっぱである～7:きわめて詳細である |
| 一貫性 | この出来事に続いて起きた出来事を | 1:まったく覚えていない～7:はっきり覚えている |
| 再体験の感覚 | この出来事を思い出すと、再び経験しているような気持ちに、 | 1:まったくならない～7:強くなる |
| 身体感覚 | この出来事の記憶の中に五感(音や声、匂い、味覚、触覚)は、 | 1:まったく含まれていない～7:たくさん含まれている |
| 感情 | この出来事を経験した時の感情や気分は、 | 1:非常によくなかった～7:非常によかった |
| 新奇性 | この出来事の状態全体は、 | 1:非常にめずらしい～7:非常にありふれている |
| 自己との関連 | この出来事と今の自分との間につながりが、 | 1:まったく感じられない～7:強く感じられる |
| 重要性 | この出来事は、私にとって | 1:まったく重要ではない～7:非常に重要である |

ある「鮮明度(4項目)」、その出来事と他の出来事が繋がり一貫したストーリーとして想起される程度である「一貫性(1項目)」、出来事の想起時に再びその出来事を体験している感覚を伴う程度である「再体験の感覚(1項目)」、出来事の想起時に五感を伴う程度である「身体感覚(1項目)」の想起過程の特性に関する5カテゴリーに加え、その出来事の珍しさの程度である「新奇性(1項目)」、その出来事が自分を象徴している程度を表す「自己との関連(1項目)」、その出来事が自身に影響を与えた程度である「重要性(5項目)」の出来事の特長に関する3カテゴリー、そして出来事と想起過程の両方に関わり、出来事を経験したときの自己の感情や印象を表す「感情(1項目)」の計9カテゴリーに分類された(表1)。また、リハーサル頻度の質問に付随して、出来事の想起の契機を選択肢(「当時の友人と会った時」、「ふとした時」等)から選択する項目を独自に1項目追加した。

2.1.5. キャンプの記憶に関する自伝的推論

自伝的推論の内容(課題2)を検討するため、最も印象に残っている出来事や場面から受けた影響について自由記述で回答を求めた。また、全く影響を受けていないと評価している者に対しては、どのような意味で印象に残っているかについて回答を求めた。

2.2. 調査対象

調査は、子ども時代(幼児期～18歳)に組織キャンプへの参加経験をもつ19歳以上の者を対象とした。多様な記憶を収集するため、参加したキャンプの主催団体やプログラム内

容などは限定していない。

2.3. 調査方法

「キャンプの記憶に関するアンケート」の質問項目について、Google Formを用いたWebアンケートの形で一般に公開し、2016年7月中旬～2016年9月下旬の期間でデータ収集を行った。回答の依頼は機縁法を主な方法とし、SNSでの情報公開やチラシの配布を通じて本研究の概要およびアンケートフォームのURLが周知された。大学での野外教育関連授業におけるデータ収集も併せて行った。

研究の目的や倫理的配慮については、回答者全員が確認できるよう、アンケート回答ページの先頭に記載した。

2.4. 分析方法

記憶特性得点の量的データについては、回答者の年齢区分(3群)間の得点比較には1要因分散分析、および多重比較としてFisher's LSD法を用いた。また、出来事ごとの記憶特性得点の検討には、記憶特性を取り扱う先行研究において一般的に用いられている中間値(4.0)とのt検定を用いた⁵⁾¹⁵⁾¹⁶⁾¹⁷⁾。統計処理にはIBM社のSPSS Statistics 22を用いた。自由記述によって収集された自伝的記憶の内容、自伝的推論の内容に関するテキストデータは、それぞれについてKJ法によりカテゴリーを生成した。

3. 結果と考察

有効回答数は191件であった。有効回答の内訳は男性110名(57.6%)、女性81名(42.4%)であり、年齢区分ごとの人数は、青年期(19～25歳)が89名(46.6%)、成人期前期(26～35歳)

が 62 名(32.5%)、成人期(36 歳以上)が 40 名(20.9%)であった(表 2)。

表-2. 回答者の現在の年齢区分と性別

| 年齢区分 | 回答数 | 性別 | 回答数 | 計 |
|-------------------|-------------|----|-------------|------|
| 青年期 (19~25歳) | 89人 (46.6%) | 男性 | 54人 (28.3%) | 191人 |
| | | 女性 | 35人 (18.3%) | |
| 成人期前期 (26~35歳) | 62人 (32.5%) | 男性 | 31人 (16.2%) | |
| | | 女性 | 31人 (16.2%) | |
| 成人期 (36歳以上) | 40人 (20.9%) | 男性 | 25人 (13.1%) | |
| | | 女性 | 15人 (7.9%) | |

3. 1. キャンプの記憶の内容と記憶特性(課題 1)

3. 1. 1. キャンプに関する自伝的記憶の内容

はじめに、最も印象に残っている出来事や場面を経験した学年別に概観すると、幼稚園時代 5 名(2.6%)、小学校低学年時代(小学校 1-3 年生) 16 名(8.4%)、小学校高学年時代(小学校 4-6 年生) 105 名(55.0%)、中学校時代 38 名(19.9%)、高校時代 27 名(14.1%)であり、約半数が小学校高学年で生じた出来事を挙げた。また、回答者にとって最も印象に残っているキャンプの実施形態は、「学校教育における集団宿泊学習、林間学校などのプログラム」が 83 名(43.2%)、「青年の家、少年自然の家といった青少年教育施設が主催するプログラム」が 14 名(7.3%)、「地方自治体(教育委員会)の青少年を対象としたプログラム」が 14 名(7.3%)、「民間団体が実施するプログラム」が 70 名(36.6%)であった(表 3)。

次に、最も印象に残っているキャンプの出来事や場面に関する自由記述を、出来事が生じたプログラムや状況を観点にした「場面分類」、そして出来事の対象を観点にした「対象分類」の 2 つの観点から分類した(表 4)。複数の内容が記述されている場合は、より厚く記述されている内容を採用した。

「場面分類」においては、「キャンプファイヤー(キャンドルフアイヤー)」に関する回答が 41 件(21.5%)と最も多く、その内容は、ス

タンツの記憶や、火の存在などその場の雰囲気に関する記憶などであった。続いて「登山・ハイキング・ソロビバーク」が 27 件(14.1%)、「野外炊事」が 20 件(10.5%)、そして水辺活動やスキー、スノーボードなどの「その他野外活動」が 39 件(20.4%)であり、全体的に野外活動に特有なプログラムの場面が多く挙げられた。その他、寝食の場面など「その他生活全般」に関する記述が 64 件(33.5%)であった。キャンプを代表する活動であり、キャンプ以外の場面で頻繁に経験することが考えにくい「キャンプファイヤー」は、最も印象的な場面として多くのキャンプ経験者に記憶される活動であると言える。また、身体的・精神的な負荷を伴う登山やハイキング、ソロビバークは、その厳しい状況に直面した場面として、また困難を克服した達成感を感じた場面として、多くの参加者が最も印象的な場面として記憶していた。

続いて「対象分類」においては「仲間との関わり」の場面に関する回答が 41 件(21.5%)と最も多く、友人との語らいや、揉め事、異学年の交流、班のメンバーとの協力やリーダーシップの発揮の場面などが記述された。次に多く回答されたのは、自然の美しさや厳しさ、自然の中の不快感に触れた場面、火に関する内容を記述した「自然体験・火」に関する出来事で、36 件(18.8%)であった。そして「指導者との関わり」には 29 件(15.2%)の回答があり、指導者との温かな交流の記憶、指導者が楽しませてくれた記憶などが主な回答であった。しかし中でも 3 名については「全員 2 時間正座で説教を聞かされた」、「周りの大人が助けてくれなかった」など、指導者に関するネガティブな出来事を回答した。また、自己の変化や、自己の感情を主に記述した「自己」カテゴリーは 17 件(8.9%)が分類され、その他、自己に関する出来事の中でも「達成体験」に関する記述は 16 件(8.4%)であった。その他、「登山をしたこと」「野外炊事をしたこ

表-3. 最も印象に残っている出来事が生じたキャンプの実施形態

| 実施形態 | 回答数 |
|----------------------------------|--------------|
| 学校教育における集団宿泊学習、林間学校などのプログラム | 83 人 (43.5%) |
| 青年の家、少年自然の家といった青少年教育施設が主催するプログラム | 14 人 (7.3%) |
| 地方自治体(教育委員会)の青少年を対象としたプログラム | 14 人 (7.3%) |
| 民間団体が実施するプログラム | 70 人 (36.6%) |
| その他 | 6 人 (3.1%) |
| 覚えていない | 4 人 (2.1%) |

表-4. 最も印象に残るキャンプの記憶の内容

| 分類 | カテゴリ | 回答数 | 回答例 |
|------|-----------|-----|---|
| 場面分類 | キャンプファイヤー | 41 | 1日目の夜のキャンプファイヤーでみんなで踊ったこと。自然の中で真っ暗な中の火の光は幻想的なものであり、日々の生活を忘れさせてくれる様な体験であった。 |
| | 登山 | 27 | 初めての本格的登山。とても苦しかったが、登った時の達成感、充実感などは最高であった。また、夕焼けや朝焼け、星空などの景色がとても美しかった。 |
| | 野外炊事 | 20 | グループに分かれ、飯盒炊爨を行ったことが思い出深い。自分で料理もしたことがなかったが、みんなで協力し、ご飯を炊くところから始まり、カレーのルーを作り、出来上がりを待ち、みんなで美味しく食べる。この流れが本当に楽しかった。 |
| | その他野外活動 | 39 | パラグライダーをやった。班担当のカウンセラーとパラグライダーの指導してくれる人が数名いた。場所は牧場の小高い丘で、その少し急な斜面で少し飛んだくらいだったが、小学生の自分は忘れられない体験になった。 |
| | その他生活全般 | 64 | ひろい座敷で雑魚寝で、寝付けなくてリーダーに寝かしつけてもらったこと。キャンプ3日目くらいで、自分にとっては、本当に何気ない場面。特にすごうれい、悲しいって事もなかったように記憶しているが、なぜか覚えている。 |
| | 計 | 191 | |
| 対象分類 | 仲間 | 41 | スタンプで何をやるか話し合っているときに、意見が合わず、苛立ちを覚えていた。そこで「相手の意見を尊重する、認める」ことによって、スムーズに物事が決まっていた。…「譲る、相手の意見を認める」ということの難しさと、素晴らしさを学んだ。 |
| | 自然・火 | 36 | 30人ほどのクラスメンバーで原生的な樹林内を歩いたり、森の中から山の景色を見た体験が印象深かったです。…当時から自然や生物に興味がありましたが、樹林の中の岩場や崖で、普段見ることができない高山植物を見られたことに感激しました。 |
| | 指導者 | 29 | オリエンテーリングで道に迷ってしまい、グループみんなで途方にくれたとき、リーダー役の大学生が答えではなく、答えを導き出すためのヒントをくれたことが今でも印象に残っています。 |
| | 自己 | 17 | 活動自体は全て印象的だったが、一番自分が驚いたのは、終わったあとに、人の見方が変わったこと。ざっくり言うと、外見ではなく中身を見るようになった。 |
| | 達成体験(自己) | 16 | 十数時間かけて道無き道を皆で歩き、夜間に温泉に辿り着いた。…多少の危機感とワガママを言ったり弱音を吐く時ではないと子供ながらに誰もが感じていた。感じた事のない達成感を得、また辛抱がついて少し大人になった。 |
| | プログラム | 52 | キャンプファイヤー。詳細は覚えていませんが、夜に外で火を囲んで歌ったりゲームをしたりしたのが印象に残っています。 |
| | 計 | 191 | |

と」など、単純な「プログラム」経験に関する記述が 52 件(27.2%)であった。

3.1.2. キャンプの記憶の記憶特性

1) キャンプの記憶の内容と記憶特性

全回答者の記憶特性得点について、記憶特性カテゴリ毎に中間値(4.0)との t 検定を行うと、「リハーサル頻度」「鮮明度」「自己との関連」において有意差はなく、「感情」「重要性」は有意に高く、「一貫性」「再体験の感覚」

「身体感覚」「新奇性」は有意に低い結果となった(表 5)。「感情」得点の高さは、快感情を伴う出来事が多く回答されたことを、「新奇性」得点の低さは、珍しいと評価される出来事が多く回答されたことを示していた。

次に出来事の内容毎に記憶特性得点を検討すると、登山のゴールやキャンプ最終日等の出来事に関する記述が含まれる「達成体験」に関する記憶特性得点は、中間値(4.0)と比較

表-5. 全回答者の記憶特性得点と出来事の内容、および年齢区分との比較

| | | 記憶特性 カテゴリー | | | | | | | | | | 自伝的 推論 | |
|---------------------|---------------|-------------|---------|--------|------------|---------|---------|---------|------------|---------|---------|-----------|---------|
| n | | リハーサル 頻度 | 鮮明度 | 一貫性 | 再体験の 感覚 | 身体感覚 | 感情 | 新奇性 | 自己との 関連 | 重要性 | | | |
| 全回答者 | 191 | M | 3.85 | 4.15 | 3.37 | 3.42 | 3.62 | 5.09 | 3.27 | 4.12 | 4.38 | 4.35 | |
| | | SD | 1.72 | 1.50 | 2.04 | 1.86 | 1.81 | 1.94 | 1.76 | 1.76 | 1.70 | 1.65 | |
| 中間値(4)とのt検定 t(190)= | | | 1.19 | 1.40 | 4.29*** | 4.31*** | 2.92** | 7.78*** | 5.70*** | 0.91 | 3.13** | 2.90** | |
| 出来事の内容 場面分類 | キャンプ ファイヤー | 41 | M | 3.54 | 4.12 | 3.54 | 3.49† | 3.78 | 5.80*** | 3.41* | 4.41 | 4.72** | 4.67** |
| | | | SD | 1.86 | 1.59 | 2.12 | 1.91 | 1.81 | 1.50 | 1.58 | 1.64 | 1.64 | 1.57 |
| | 登山 | 27 | M | 4.48 | 4.66* | 3.93 | 3.70 | 4.37 | 5.33** | 2.41*** | 4.41 | 4.99** | 4.90** |
| | | | SD | 1.64 | 1.49 | 2.06 | 1.84 | 1.67 | 1.98 | 1.28 | 1.55 | 1.63 | 1.54 |
| | 野外炊事 | 20 | M | 3.03* | 3.30* | 2.70** | 2.15*** | 2.60** | 4.60 | 3.20† | 3.20* | 3.33 | 3.31† |
| | | | SD | 1.68 | 1.49 | 1.89 | 1.27 | 1.60 | 1.70 | 1.74 | 1.61 | 1.80 | 1.71 |
| | その他 野外活動 | 39 | M | 3.59† | 3.97 | 3.18* | 3.41* | 3.59 | 4.46 | 3.85 | 3.49† | 3.82 | 3.76 |
| | | | SD | 1.44 | 1.27 | 1.93 | 1.62 | 1.58 | 2.00 | 1.83 | 1.62 | 1.46 | 1.46 |
| | その他 生活全般 | 64 | M | 4.20 | 4.33† | 3.34* | 3.66 | 3.53† | 5.06*** | 3.22** | 4.47* | 4.59** | 4.58** |
| | | | SD | 1.72 | 1.48 | 2.06 | 2.03 | 1.94 | 2.07 | 1.91 | 1.88 | 1.67 | 1.63 |
| | 仲間 | 41 | M | 4.15 | 4.29 | 3.46 | 3.93 | 3.59 | 5.20*** | 2.83*** | 4.46† | 4.62* | 4.60* |
| | | | SD | 1.75 | 1.48 | 2.06 | 1.78 | 1.84 | 2.02 | 1.56 | 1.63 | 1.75 | 1.66 |
| | 自然・火 | 36 | M | 3.81 | 4.43 | 3.11* | 3.64 | 3.86 | 4.75* | 3.17* | 4.06 | 4.38 | 4.33 |
| | | | SD | 1.76 | 1.61 | 2.09 | 2.23 | 1.81 | 2.21 | 1.87 | 1.82 | 1.61 | 1.57 |
| | 指導者 | 29 | M | 4.15 | 4.54† | 3.55 | 3.62 | 3.86 | 5.62*** | 3.97 | 4.28 | 5.05*** | 4.94*** |
| | | | SD | 1.53 | 1.50 | 2.05 | 1.66 | 1.87 | 1.88 | 1.86 | 1.75 | 1.24 | 1.25 |
| | 自己 | 17 | M | 3.69 | 4.44 | 3.65 | 2.94* | 4.18 | 4.47 | 3.00† | 4.88* | 4.43 | 4.50 |
| | | | SD | 1.71 | 1.33 | 2.37 | 1.78 | 1.59 | 2.07 | 2.00 | 1.65 | 1.84 | 1.71 |
| 達成体験 (自己) | 16 | M | 5.19** | 4.66* | 4.25 | 4.31 | 4.69 | 6.13*** | 2.94* | 4.44 | 5.42*** | 5.28*** | |
| | | SD | 1.15 | 1.04 | 1.77 | 1.74 | 1.58 | 0.89 | 1.73 | 1.15 | 0.80 | 0.75 | |
| プログラム | 52 | M | 3.12*** | 3.38** | 3.00*** | 2.63*** | 2.83*** | 4.83** | 3.50* | 3.44* | 3.50* | 3.49* | |
| | | SD | 1.64 | 1.36 | 1.91 | 1.56 | 1.64 | 1.77 | 1.64 | 1.85 | 1.75 | 1.74 | |

***p<.001, **p<.01, *p<.05, †p<.10

| | | 太字:検定の結果、評定の間値(4.0)との間に有意差がみられた項目。下線付きは有意に低い得点であったことを示す。 | | | | | | | | | | | |
|---------------------|-----------|--|------|------|------|------|--------|------|------|-------|-------|-------|------|
| 年代区分 | 青年期 | 89 | M | 3.65 | 4.10 | 3.48 | 3.37 | 3.29 | 4.94 | 3.42 | 3.82 | 4.04 | 4.01 |
| | | | SD | 1.70 | 1.48 | 2.15 | 1.90 | 1.69 | 1.94 | 1.71 | 1.86 | 1.77 | 1.73 |
| | 成人期 前期 | 62 | M | 3.95 | 4.16 | 3.23 | 3.31 | 4.18 | 5.16 | 3.18 | 4.35 | 4.73 | 4.67 |
| | | | SD | 1.54 | 1.50 | 1.89 | 1.83 | 1.73 | 2.04 | 1.88 | 1.69 | 1.51 | 1.48 |
| | 成人期 | 40 | M | 4.15 | 4.26 | 3.33 | 3.70 | 3.48 | 5.30 | 3.10 | 4.40 | 4.61 | 4.58 |
| | | | SD | 2.01 | 1.55 | 2.03 | 1.86 | 2.03 | 1.76 | 1.72 | 1.57 | 1.70 | 1.59 |
| 年齢区分間分散分析 F(2,188)= | | | 1.33 | 0.17 | 0.30 | 0.59 | 4.70** | 0.53 | 0.57 | 2.39† | 3.47* | 3.54* | |

***p<.001, **p<.01, *p<.05, †p<.10 太字:多重比較の結果、差が有意だった組み合わせ。

して、リハーサル頻度得点 (M=5.19, SD=1.15)が1%水準で有意に高く($t(15)=4.11$, $p<.01$)、鮮明度得点 (M=4.66, SD=1.04)が5%水準で有意に高く($t(15)=2.52$, $p<.05$)、重要性得点 (M=5.42, SD=0.80)においても0.1%水準で有意に高く($t(15)=7.08$, $p<.001$)、「感情」得点(M=6.13, SD=0.89)も突出して高かった($t(15)=9.64$, $p<.001$)。キャンプを経験してから現在に至るまでの間に、強い快感情を伴う達成体験は頻繁に想起されたり、他者に語られたりし、「重要な出来事だ」と解釈される中で、その記憶の鮮明さや一貫性、再体験の感覚や身体感覚が保たれていることが示された。

一方で「野外炊事」場面に関する記憶や、自己や他者、自然などの記述がない単純な「プログラム」経験の記憶は多くの回答者が「最も印象に残っている出来事」として挙げている反面、「感情」得点以外の記憶特性得点は全て有意に低い値であった。珍しい経験で、楽しかった思い出として保持されているものの、重要な記憶としては認識されておらず、想起される頻度は低く、鮮明さや一貫性、身体感覚などは薄れつつある記憶であると言える。

2) 現在の年齢と記憶特性

続いて、年齢区分ごとに記憶特性を比較すると、青年期群は成人前期群と比べ、身体感

覚($F(2,188)=4.70, p<.01$)と重要性($F(2,188)=3.47, p<.05$)の得点が有意に低く、青年期群の多くが五感を含まない単純なエピソードに関する回答であったことが伺えた。一方でリハーサル頻度や鮮明度、一貫性などのカテゴリーでは3群間で有意差はみられず、最も印象に残る出来事として保持されているキャンプの記憶は、キャンプ経験から年月が経過していても、その記憶を想起する頻度や鮮明さ、記憶の一貫性は維持されることが示された。

3.2. 自伝的推論の程度とその内容(課題2)

3.2.1. 自伝的推論の程度

1) キャンプの記憶の内容と自伝的推論

自伝的推論に関する先行研究⁴⁾に倣い、「自己との関連」と「重要性」の合計得点の平均を自伝的推論得点とした。「自伝的推論」は、想起された出来事を解釈・評価したり、過去の記憶を互いに結び付けたり、過去の記憶と現在の自己を結び付けたりする内省的な思考過程を指し、この得点が高いほど、自己形成に大きく影響を及ぼしていることを意味する。全回答者の平均得点は、4.35(SD=1.65)であり、全体として中間値(4.0)よりも1%水準で有意に高い得点であった(表5)。なお、3点未満が42人(22%)、3点以上～5点未満が74名(38.7%)、5点以上～7点が75名(39.3%)であった。

出来事の内容ごとに、自伝的推論得点を中間値(4.0)と比較すると、「キャンプファイヤー」($M=4.35, SD=1.65, t(40)=2.74, p<.01$)や「登山」($M=4.90, SD=1.54, t(26)=3.06, p<.01$)、「生活全般」($M=4.58, SD=1.63, t(63)=2.83, p<.01$)、「仲間との関わり」($M=4.60, SD=1.66, t(40)=2.30, p<.05$)、「指導者との関わり」($M=4.94, SD=1.25, t(28)=4.06, p<.001$)、「達成体験」($M=5.28, SD=0.75, t(15)=6.78, p<.001$)は有意に高い一方、「野外炊事」($M=3.31, SD=1.71, t(19)=1.81, p<.10$)や「プログラム」単体の記憶($M=3.49, SD=1.74, t(51)=2.11, p<.05$)は低い得点であった。

自伝的推論に関連する要因として、キャンプファイヤーの記憶をはじめ、全体として、多くの回答者がキャンプで感じた楽しさについて記述していた。そのように、キャンプが「楽しい」場であることは、その後の継続した参加に繋がることや、後の人生においてキャンプの記憶を想起した際に快感情を伴い、肯定的な評価を引き出すという面で、様々なキャンプによる影響の基本となる重要な要素であると言える。また、登山・ハイキング・ソロビバークやキャンプ最終日など何かを達成した経験や、不便な野外生活経験、仲間や指導者との交流の記憶などは、参加者が後の人生において「その記憶から何かを学んだ」、「自己にとって重要な記憶である」という評価をする傾向にあった。キャンプ経験のなかに、適度な身体的な負荷や、葛藤や緊張、悔しさ、不快感などの精神的な負荷が含まれること、それを乗り越える経験が、後に参加者がキャンプの経験に意味を見出すことに繋がると考察される。

加えて、指導者が参加者に与える影響の強さはこれまでも指摘されてきたが、記憶の観点からみても、指導者との交流の記憶は強い影響力を持つと言える。指導者の温かさや面白さの記憶、そして指導者と世代を越えた交流をすることで「大人の世界」に触れた記憶は、些細な出来事でも参加者の記憶に強く残ることが確認された。成人した参加者は、そんな些細な出来事の記憶からも影響を受けることがある。指導者が積極的に参加者と関わり合いを持ち、コミュニケーションを取ることが非常に重要なことだと言えるだろう。

2) 現在の年齢と自伝的推論

3つの年齢区分間で自伝的推論得点の分散分析を行うと、5%水準で有意差がみられ($F(2,188)=3.54, p<.05$)、多重比較の結果、成人前期は青年期と比べて5%水準で有意に得点が高く、成人期は青年期と比べて得点が高い傾向がみられた。つまり、25歳以下の青年

期世代よりも、26歳以上の成人前期、成人期世代の回答者の方が、過去のキャンプ経験に対して「その記憶から何かを学んだ」、「自己にとって重要な記憶である」などと評価する

よくなると言え、年齢を重ねると自伝的推論が促進されるという先行研究⁶⁾の知見とおおよそ一致した。

表-6. 自伝的推論に関する自由記述の分類と回答件数、回答例

| | |
|---|--|
| <p>A.自己：101名(52.9%),156件</p> | <p>C.自然環境：39名(20.4%),46件</p> |
| <p>A1.何らかの価値観や考え方を学んだ(42件)</p> | <p>C1.自然環境への興味関心が向上した(19件)</p> |
| <p>・不便な場所へ行ったときの対処法や、人と関わっていく上で大切なこと、命の尊さ、自然と共に生きている、ということ。生きていく上で大切なことを学んだと思っています。</p> | <p>・特に、大人になってからも自然の中で遊びたいという気持ちを強く持てるのはキャンプの経験があるからだと感じる。また、森林保護や自然環境保全に興味を持っていることにも影響があると感じています。</p> |
| <p>A2.自己理解につながった(15件)</p> | <p>C2.自然環境への抵抗感が軽減した(4件)</p> |
| <p>・幼い頃からわりとしっかりしている方であり、役割を与えられることもなく自然と小さい子の面倒を見るということは、私自身をよく表すエピソードであると思う。また、この頃から、自分にリーダーシップや面倒見の良さがあることを自覚始めたと思う。</p> | <p>C3.自然の厳しさを知った(2件)</p> |
| <p>A3.行動・性格・習慣が肯定的に変化した(47件)</p> | <p>C4.自然観が築かれた(11件)</p> |
| <p>・物事の全体像を想像するくせがついた。自分が全体の中でよりよいパーツになるようにしたいと思うようになった。</p> | <p>・自然に対する接し方、考え方に大きく影響していると思う。自然は人間が容易にコントロールできるものではないと言うこと、また自然は流動的であり過去の情報にとらわれていては、目の前の現実を誤って捉えてしまう危険性があることを学んだと思う。</p> |
| <p>A4.精神的な強さ・支え・自信を獲得した(17件)</p> | <p>C5.その他(10件)</p> |
| <p>・雨が降っても大丈夫。私は多分なんとかできるんじゃないかな。と思える。経験の直後からそう思っていたわけではなく、人からキャンプに参加して経験について聞かれることが多くなり、あの大雨のソロのことを思い出すことが多くなり、あのときの状況でも大丈夫だったんだから自分はわりと大丈夫かもしれない、と思うようになった。</p> | <p>・自分のからだ全てで感じられること、他の人たちと切り離されて自然と自分が対一になる瞬間を体験することはすごく重要だと思う。小さい頃は集団で何かをするのが苦手な人たちだったので、テント張りとかごはんの支度とか協力するのはちょっと気が進まなかったけど、自然のなかにぼつんと居られる時間は自分にとって重要でした。</p> |
| <p>A5.ロールモデルを獲得した(6件)</p> | <p>D.野外活動：21名(11.0%),21件</p> |
| <p>・自然の家では自分からすると大人の男性や女性リーダーで早く大人になりたい！憧れをもった記憶があります。きっと普段かかわることのない大人の男女はとても衝撃で良い記憶が今のわたしに生きています。少なからず、こんな優しい大人になりたい！という目標にもなっていました。リーダーの方たちが良い姿を見せて教えてくれたからこそ小さい私たちからすると良い影響を受けたのだと思います。親や教師からなにを言われようが耳にはいらぬことがリーダーからの言葉だと、すんなり耳にはいるというボイスチェンジがあったのだと今はそう感じます。</p> | <p>D1.野外活動への興味関心が向上した(15件)</p> |
| <p>A6.人生を支える体験となった(22件)</p> | <p>・大学では野外活動や登山に興味を持ち、活動に取り組んだ。</p> |
| <p>・キャンプに参加した記憶は、今の私を作る一部だと思っています。仲間と共同で生活することの楽しさと大変さ、たくさんの友達がいると楽しいということ、火や刃物が危ないということ、沢の水は冷たいということ、雨の後の森の匂い、そういう基本的なことの記憶を辿ると、キャンプの記憶に行き着くことが多いです。なので、私の中では無くてはならない記憶になっています。</p> | <p>D2.野外活動技術を習得した(4件)</p> |
| <p>A7.その他(7件)</p> | <p>D3.野外活動への抵抗感が軽減した(2件)</p> |
| <p>・昔の自分と今の自分を比較する意味がある。自分がどれくらい成長したなとか、変わっていないなとか、昔の方が行動力があつたなとか、とか。また、今子供に教えている時に、昔自分がどう思っていたかを参考にすることがある。昔の自分だったら辛いとか、熱中できるな、とか。</p> | <p>E.進路や職業選択への影響：26名(13.6%),26件</p> |
| <p>B.他者：38名(19.9%),49件</p> | <p>E1.進路や職業選択に影響を与えた(26件)</p> |
| <p>B1.チームワークの態度を学んだ(25件)</p> | <p>・野外活動に興味をもち、それを職業にしたいと志すようになった。原点。</p> |
| <p>・集団生活の中から人を尊重することや、役割を果たすことを学ぶ。また、全員が平等の経験をする中で、自分の得意とすることの発見や得意とすることへの挑戦などから成功体験を経験し、自分の力で自信を身につける力をつけるきっかけになる。という意味を感じる。</p> | <p>・原生的な自然環境の不思議さや面白さに気付き、それらを保全する仕事を志すきっかけの一つになりました。</p> |
| <p>B2.多様性を認められるようになった(3件)</p> | <p>F.その他：29名(15.2%),34件</p> |
| <p>・見知らぬ初対面の相手とも、ともに受け入れ理解しあえることを体験から会得したように思います。異文化理解や他者理解の壁を著しく下げたできごとです。</p> | <p>F1.仲間との共通の思い出を得た(5件)</p> |
| <p>B3.対人態度を学んだ(12件)</p> | <p>F2.自分の子どもにも経験させたい(7件)</p> |
| <p>・自分のありのままを人前でさらけ出すことができるようになった</p> | <p>F3.非日常の経験だった(7件)</p> |
| <p>B4.人間関係の楽しさを知った(9件)</p> | <p>・ハレとケの自分の出し方を思い出させてくれるものだと思います。非日常な環境下での非日常な活動を体験することで、その場その場での新しい自分自身を発見できてとても楽しかった記憶がありません。</p> |
| <p>・自分以外の誰かと同じ時間を共有する心地よさや、共に何かに取り組む楽しさ、他の人の経験を聞く面白さなどを強く感じるきっかけとなった点で影響を受けています。当時ももちろんその良さを感じていましたが、中学に入ってボランティアとしてお手伝いした時に改めてあの時間の良さを同期の友人と確認しました。</p> | <p>F4.経験の一つとなった(6件)</p> |
| <p>G.印象・思い出：33名(17.3%),33件</p> | <p>F5.その他(9件)</p> |
| <p>G1.その場の印象が強かったために覚えている、単なる思い出(33件)</p> | <p>・野営を経験した翌日、いやその瞬間以降の人生は、経験しない人生とは大きく違い、その延長線上に今の自分がいるのだということ。</p> |
| <p>・過酷な経験だった点で、印象に残っている</p> | <p>F.その他：29名(15.2%),34件</p> |
| <p>・辛い思い出</p> | <p>F1.仲間との共通の思い出を得た(5件)</p> |
| <p>・懐かしい小学校の頃の思い出</p> | <p>F2.自分の子どもにも経験させたい(7件)</p> |
| <p>・とても楽しかった思い出として残っているだけで影響はしていない</p> | <p>F3.非日常の経験だった(7件)</p> |

3.2.2. 自伝的推論の内容

自伝的推論に関する記述(複数回答、計 365 件)を KJ 法によって分類した結果、約 2 割の回答者にとっては「いい思い出」以上の意味を持たないエピソード記憶として保持されていた。

一方で他の 8 割の回答者の記述は自己への影響、対人関係に関する影響、自然への認識に関する影響、野外活動への興味関心に関する影響、進路や職業選択への影響、その他影響の 6 群に分類され、自己・他者・自然の三大観点¹⁸⁾を中心に多様な影響が認識されていた(表 6)。

4. 結論

4.1. 要旨

本研究では、子ども時代のキャンプ経験が参加者に与える長期的な影響を明らかにすることを目的とし、子ども時代に組織キャンプへの参加経験をもつ 19 歳以上を対象に「キャンプの記憶に関するアンケート」を用いた調査を行い、以下の 2 つの課題についての検討を行った結果、以下のことが明らかになった。
課題 1：子ども時代の組織キャンプ参加経験に関する自伝的記憶の内容とその記憶特性を明らかにする

- 1)「キャンプファイヤー」や「登山」、「野外炊事」などの野外活動場面や「生活全般」の場面、そして「仲間との関わり」、「指導者との関わり」、自然の美しさに触れた「自然体験」の場面など、様々な出来事が参加者の記憶に残る。
- 2)登山やキャンプ最終日など、何かを達成した「達成体験」の記憶は、他の場面の記憶と比較して、現在に至るまでより頻繁に想起され、より鮮明に記憶され、より重要な記憶であると評価されている。
- 3)最も印象に残っているキャンプの出来事の記憶のリハーサル頻度や鮮明度、一貫性、再体験の感覚などの想起特性は、青年期群

と成人前期群、成人期群で差はなく、年齢を重ねても参加者の記憶に安定して残り続ける。

課題 2：子ども時代の組織キャンプ参加経験に関する自伝的推論の程度とその内容を明らかにする

- 4)最も印象に残っているキャンプの出来事として想起される記憶は、全体的に自伝的推論が進んでおり、自己との繋がりや、重要性が見出されている。中でも「キャンプファイヤー」や「登山」、「生活全般」、「仲間との関わり」、「指導者との関わり」、「達成体験」などの記憶は「その記憶から何かを学んだ」、「その記憶から影響を受けた」といった自伝的推論につながりやすい。
- 5)子ども時代に組織キャンプへ参加した経験のある者のうち、約 8 割が、キャンプ経験から現在でも何らかの影響を受けていると意味づけ、自己を支える自伝的記憶として保持している。しかし約 2 割のキャンプ経験者にとっては「いい思い出」以上の意味を持たないエピソード記憶として保持されている。
- 6)子ども時代のキャンプの記憶がもつ重要性について、青年期群よりも、年齢を重ねた成人前期群、成人期群の方がより重要であると評価している。キャンプ経験による参加者への影響は、年齢を重ねた後に認識され、意味づけされる傾向にある。
- 7)子ども時代の組織キャンプ参加経験は、現在の参加者に対し、自己への影響、対人関係に関する影響、自然環境への認識に関する影響、野外活動への興味関心に関する影響、進路や職業選択への影響など、「自己」、「他者」、「自然」の三大観点を中心に多様な影響を与えている。
以上のように、多くのキャンプ経験者にとってキャンプに関する記憶は「長い年月を経てもなお色褪せない想起特性を維持(p.136)」⁶⁾する重要な記憶として保持されていた。加え

て参加者が年齢を重ねると、キャンプ直後には認識されなかった影響に気づき、キャンプの記憶をより重要だと意味づけるようになることが確認された。その影響は多岐にわたっており、まさに全人的教育であると言える。キャンプ経験には「経験の潜在性」があり、キャンプの教育効果の全容は、キャンプ直後に現れるものだけではないことを、参加者の保護者をはじめ、社会に周知することで、組織キャンプへの理解を促進することが出来るだろう。

4.2. 本研究の限界および今後の課題

本研究において用いた「キャンプの記憶に関するアンケート」は、筆者が独自に作成したものであり、信頼性および妥当性には課題が残るものである。また、本研究では、独立変数を「出来事の内容」と「現在の年齢」に限定して分析を行った。また、取り扱った出来事の内容についても「場面分類」と「対象分類」のカテゴリー間の相互関係など、詳細な分析に至っておらず、子ども時代のキャンプの記憶の全体を概観したに留まっている。今回取り扱っていない「現在の野外活動頻度」や「キャンプ参加歴」などの変数に関する分析や、出来事のカテゴリーの詳細な分析を進めていくことで、子ども時代のキャンプ経験がその後の人生に与える影響をより詳細に把握することが可能になるだろう。

注及び引用文献

- 1) 森井利夫(1995)：キャンプの意味—今、改めてキャンプを問う、現代のエスプリ、至文堂、334:5-16.
- 2) Squire, L.R. (1992) : Declarative and Nondeclarative Memory: Multiple Brain Systems Supporting Learning and Memory, *Journal of Cognitive Neuroscience*, 4(3):232-243.
- 3) Liddicoat, K.R. (2013) : Memories and lasting impacts of residential outdoor environmental education programs, *Doctoral dissertation, Cornell University*.
- 4) 佐藤浩一(2014)：自伝的推論—概念ならびに評価方法の整理と包括的な枠組みの提案—、群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編、63:129-148.
- 5) 佐藤浩一、清水寛之(2013)：現職教員における過去の教職志望と自伝的記憶との関連：記憶特性と想起内容の分析を通して、群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編、62:147-156.
- 6) 佐藤浩一(2007)：自伝的記憶の構造と機能、新潟大学大学院現代社会文化研究科、博士論文.
- 7) 渡邊仁、井村仁、多田聡(2008)：悩みを抱える青少年のキャンプ参加における自己概念の変化、悩みを抱える青少年を対象とした自然体験プログラムの心理臨床的効果に関する研究(研究代表者 坂本昭裕)、平成16-19年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書、9-14.
- 8) 小田梓、坂本昭裕(2010)：長期冒険キャンプに参加した不登校児の体験の意味づけに関する研究、筑波大学体育科学系紀要、33:227-231.
- 9) 堀出知里、飯田稔(2006)：不登校の子どもを対象としたキャンププログラムの事例研究(4)—キャンプに参加した不登校児の追跡調査—、日本野外教育学会第9回大会プログラム・研究発表抄録集、97.
- 10) 伊原久美子、木谷尚史、佐藤知行(2010)：冒険教育プログラムの参加経験がその後の人生に及ぼす影響、大阪体育大学紀要、41:13-22.
- 11) 高野孝子(2007)：冒険教育プロジェクトの長期的な影響:20 から 23 年前のオペレーション・ローリーが与えた参加者へのインパクト、日本野外教育学会第10回大会プログラム・研究発表抄録集、62-63.
- 12) Cummings, J.P. (2009) : A Longitudinal

- Study of the Outcomes from
Participation in Wilderness Adventure
Education Programs, Master's Thesis,
California Polytechnic State University.
- 13)Takahashi,M. & Shimizu,H.(2007) : Do
you remember the day of your
graduation ceremony from junior high
school?: A factor structure of the Memory
Characteristics Questionnaire, Japanese
Psychological Research, 49(4):275-281.
- 14)Johnson,M.K. & Foley,M.A. &
Suengas,A.G. & Raye,C.L.(1988) :
Phenomenal characteristics of
memories for perceived and imagined
autobiographical events, Journal of
Experimental Psychology: General,
117(4):371-376.
- 15)高橋雅延(2014) : 記憶特性質問紙による不
随意記憶の検討、聖心女子大学論叢、123:
80-112.
- 16)秋山学、清水寛之(2012) : 購買に関する自
伝的記憶の特性 : 若齢者と高齢者における
時間的分布とポジティブ優位性効果に関
連して、認知心理学研究、10(1):67-79.
- 17)記憶研究の調査対象である「記憶」は多岐
に渡るため、先行研究ではそれぞれの研究
目的に合致した記憶特性項目を抽出し、調
査を行っている。標準化された尺度や得点
が確立されていない記憶特性を統計的に
評価する方法として、評定中間値との比較
をする手法が、現在の一般的な方法となっ
ている(例えば⁵⁾¹⁵⁾¹⁶⁾など)。
- 18)小森伸一(2010) : 野外教育理論の再考 I :
「三大学習観点」の提言から、東京学芸大
学紀要 芸術・スポーツ科学系、62:39-46.

(平成 29 年 5 月 30 日受付)

(平成 29 年 12 月 12 日受理)